

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No. 82
FEBRUARY 2018



「ワット・ヤイ・チャイモンコン(タイの首都バンコク)」

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

私の楽しみ 図書館長 笹谷浩一郎 1

仮面を脱いで現れるもの 一般科目文科 望月 高明 2

定年退職を迎えるに当たって
電気情報工学科 鶴沢 偉伸 4

特集

校内読書感想文コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞作品 6

今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長 物質工学科 後藤 光貴
副委員長 電気情報工学科 大塚 智弘 17

第五回「深山書評」入賞者発表(入賞作品) 18

図書館からのお知らせ 22

図書館開館予定について
学年末・春季休業期間中の長期貸出について
編集後記



●表紙：ワット・ヤイ・チャイモンコン

タイの首都バンコクの北部に位置するアユタヤは、中世に栄えたアユタヤ王朝の遺跡が数多く残される世界遺産に登録された古都です。その遺跡の中の一つワット・ヤイ・チャイモンコンは、スリランカから帰ってきた修行僧達が瞑想を行った場所として知られています。その修行のスタイルは、現在のタイでも受け継がれており、多くの僧侶は経典を読み、瞑想に励む日々を今も続けています。仏塔を囲むように設計されている伽藍の仏像の数々は、知識を手に入れるだけでなく、手に入れた知識を身につけることの重要性を今日でも我々に教えてくれているようです。

撮影時期：2016年10月撮影
撮影場所：(タイ王国アユタヤ県)
撮影者：一般科目文科 吉井千周

最初に質問です。以下、ある職業に従事する、私の大好きな小説の登場人物名(すべて架空の人物)を、マイナーなものから順に列挙します。その職業とは何でしょう。何人目で答えられるか挑戦してみてください。

鷺沼友哉、宮野裕之、本郷岳志、佐伯宏一、安城和也、合田雄一郎、梶聡一郎。これだけじゃ無理かな。鳴沢了、高城賢吾、安積剛、竜崎伸也。どうです、まだわかりませんか。では、これならどうですか。草薙俊平、毛利小五郎、杉下右京。そうです、警察官です。

私は中学校で英語と出会って以来、英語に関わる仕事をするのが夢でした。鹿児島県で県立高校の英語教員になり、縁あってこの学校に赴任できましたので、自分の夢だった職業に就けたことに感謝、満足しています。その一方で、教師にならなかつたら、自分にどんな生き方があったらと考えることがよくあります。そういう自分にとって、小説を読み、自分とは異なる職業に従事する登場人物に自分を重ね、主人公になりきって作品の世界を生きることは、この上ない楽しみです。

ここ数年、警察を舞台とする小説をよく読んでいます。それぞれの作品に個性豊かな警察官、刑事、警察官僚が登場し、飽きることがありません。私の好きな警察官を数名紹介したいと思います。

高村薫の「マークスの山」「レディ・ジョーカー」という作品は、ずいぶん前にベストセラーとなり、映画化もテレビドラマ化もされた作品ですが、合田雄一郎という刑事は、黒いスーツに白いスニーカーという独特なスタイルで事件に立ち向かいます。単なる犯人探しではなく、刑事を一人の人間として描き、その視点や苦悩についてもたんねんに描かれるようになったのはこの作品からではないかと私は感じています。

東京の警視庁を舞台にした警察小説が幅を利かせるなかで、佐々木譲の「北海道警シリーズ」は、北海道を舞台にした異色の作品集となっています。この作品には、佐伯宏一という刑事が登場します。彼は学生時代からずっとサクソフォンを吹いていて、警察音楽隊に入隊して演奏活動を続けるために警察官になったというユニークな経歴があります。本来の希望とは異なる刑事課に配属されますが、非常に男気があり、困難な事態に陥るほど、周囲の人間をいい方向に巻き込みながら事件に立ち向かっていきます。

堂場瞬一の代表作に「鳴沢了シリーズ」と「高城賢吾シリーズ」があります。同じ作者による、対照的な二人の刑事が登場します。鳴沢了は新潟県の祖父の代からの警察一家出身で、なるべくして新潟県警の刑事になりますが、祖父、父親が関わってきた事件を追ううちに身動きが取れなくなってしまい、新潟県警を退職してしまいます。しかし、刑事の夢をあきらめきれずに、東京の警視庁の採用試験に合格し、ストイックに刑事としての人生を歩んでいきます。

高城賢吾は順調にキャリアを重ね、警部に昇進しますが、ある事件をきっかけに酒に溺れるようになり、失踪課という閑職に追いやられます。しかし、野心家の女性上司、理不尽な人事で配属されながらも、仕事にやりがいを見つけつつある若い部下と失踪者を追い、失踪者の家族と向き合ううちに警察官としての矜持を取り戻していきます。

笹本良平の「越境捜査」は、犬猿の仲と噂される警視庁と神奈川県警の刑事が密かに協力しながら捜査を進めるという内容です。警視庁の鷺沼友哉は正義感が強く優秀な刑事ですが、ふとしたことから、神奈川県警で厄介者扱いされている、お調子者の宮野裕之と協力することになります。水と油の二人ですが、宮野の憎めないキャラクターに振り回されながらも、鷺沼は刑事として成長していきます。

今野敏の「隠蔽捜査」シリーズはテレビドラマ化されて、見た人も多いかもかもしれません。この作品の特徴は、直接捜査に当たる現場の警察官ではなく、これまであまり描かれてこなかった警察官僚を主人公にしたことです。警察庁でエリートキャリア官僚として働いていた竜崎伸也は、家族の起こした不祥事がもとで職場を追われることとなりますが、新たな配属先で、ぶれない信念のもと警察組織に化学変化を起こしていきます。

みなさんの気になる警察官はいたでしょうか。いずれも私のお勧めする魅力的な警察官です。ぜひ、一度彼らの活躍ぶりをのぞいてみてください。

警察官もいいのですが、普通のサラリーマンに憧れることがあります。そんな時は、池井戸潤の「半沢直樹シリーズ」を読めば銀行員や会社員になれます。町工場の経営者になりたければ、「下町ロケット」「空飛ぶタイヤ」「陸王」がお勧めです。

さて、今度は何になりましょうか。

一

平成 30 年 3 月をもって、私は 23 年間勤務した都城高専を退職する。私の退職自体は定年制による取り決めによるものであり、そのことに特別の感慨はない。むしろ、もはや年老いて教育・研究においてさしたる貢献、成果もあげられず、足手まといになることの方が多いのであるから、私のような者は早く退場するに如く(し)はないのである。組織が活性化して停滞しないためには、不断の新陳代謝が不可欠である。ただ、23 年といえばそれは単なる時間ではなく、既に歴史的な時間に属するといつてよい。些か三題めいて恐縮であるが、小文を3つのキー・ワードに沿って 23 年間の来し方を回顧してみたいと思う。

私は国語科の教員として二十数年にわたって都城高専の教壇に立ってきた。授業というのは、それを映像や活字によって克明に記録しない限り、その都度その都度消えていく運命にある。それだけに、果たして日々行じている授業が学生の胸奥にどの程度の痕跡を留めているかということを見ると、甚だ心許ない。このように、授業というのがその性格上、一瞬ごとに消えゆく運命を免れないことは、私が自分の授業に対して十分な信を置き得ない一因を成している。

私が国語科の教師として至って凡庸であったことは、二十年以上の教育実践を通して国語科教育に関する一篇の本格的な教育論文を物し得なかったことが最も雄弁に物語っている。このことは退職の時を迎えた現在に至るまで、国語科教育について何の識見も持ち得なかったことを暴露するものでなければならぬ。私がやってきたことといえば、たった 2 つのことにすぎない。1 つは授業中、常に大声を張り上げて授業をしてきたこと、そしてもう 1 つは授業時間を目いっぱい使って、途中で切り上げることがなかったということにすぎない。

二十数年間都城に住んで私が感じたのは、総じて宮崎県民の人柄が温和で善良であることだ。そして、このことは私にとって大変ありがたいことであった。これは南国宮崎の温暖な気候風土の然らしめるものかも知れない。このように生来、温和で善良な気象を持っていることは、その人にとってこれ以上の長所、貴いことはないと思う。これぞ孟子のいわゆる「良貴」ではないだろうか。教育とは何かということも、学問的に厳密に言えば色々難しいであろうが、それは何らかの意味で人間が持って生まれた現実性・自然性を制御し治整するものと考えられる。しかし、生来温和で善良に生まれついた学生達に、それ以上何を付加するということであろうか。なるほど私は 23 年間、本校の

教壇に立って、国語の教員として幾ばくかの知識は伝え得たかも知れない。しかし、学生たちの人間性に、その上に何ものかを付け加え得たと自負することなど到底できない。ひょっとすると、教育という美名に隠れて私は学生たちの天性をスポイルしてきたのではないかと危惧する。

二

学生時代以来、現在に至るまで私は儒教の近世的自覚の表現としての朱子学・陽明学を研究してきた。朱子学といい陽明学という学問は、もともといずれも複雑な思想構成を持ったものである。従って、この学の精神を理解するということは決して簡単なことではない。しかし、ここではそれとは別の困難について述べるとしよう。本来の漢文は、同じ大きさの四角な漢字が同一の面積を占め、同一間隔で並べてあるだけである。その文を読み解くということがどれほどの大力量を必要とする容易ならぬことであるかは、その書物を繙いてみれば判然とする。自慢ではないけれど(?)、私は宋明時代の儒学者の文献を読んでいて、よく分かったという実感を持ち得たことがかつてない。私は長年 4 年次の「国語」の後期授業は夏目漱石の小説作品を購読してきた(因みに今年度は晩年の最高傑作の一つ『こころ』を読んでいる)。そして、些か語弊のあることを承知していえば、漱石の作品はひとまず(、、、)私でも理解し得ると思っている。しかし、宋明の儒学者の文献は、漱石の小説作品を理解し得るほどには私には理解し得ないのである。私は今更ながらに自分の手には負えないとんでもない代物に従事してしまったことを思う。

私は研究の成果を毎年、論文や著書の形で問うてきた。しかし、毎年ほとんどブランクがなく研究成果を公にしてきたからといって、それはたまたまそうであったというにすぎない。上来も指摘したごとく、私の漢語文献を読解する能力というのは至って貧弱である。資料に当たっていても常に深い霧が立ち込めているように茫漠として判然としない。従って、論文を執筆していても、今年は何んとか書けたけれど、来年のことはほとんど未知に属するとしかいいようがない。私自身はこういう境位で現在に至るまで研究を続けてきた。

もともと、蟹は己の甲羅に似せて穴を掘るという。その研究成果も私という人間が人間的に卑小で至って貧しいことも手伝って、甚だ貧弱なのを免れない。儒者は天地の気象に似んことを要すというのは、宋明の儒者の常言であった。そして、中国の学問というのは紛れもなくそういう人格に担われて伝承せられてきたことは疑えない。これ中国の学問が人格の表現であ

るといわれる所以である。従って、その学問を載せる容器であるところのその人の人格が痩せこけて貧弱であることは、ほとんど致命的といってよい。

三

私は国語の教師として本校の教壇に立ってきたことから、学生・保護者、更には同僚の教員から、二十数年の間「先生」と呼ばれてきた。そして、このことが余りに長く続いたために、いつしか「先生」「先生」と呼ばれることにすっかり慣れてしまって、そのことの意味を余りよく考えないようになってしまった。しかし、私は「先生」というのは仮面なのではないかと思う。余りに長くそう呼ばれてきたために、いつしかそれを自分の本当の顔のように思ってしまったにすぎない。現代の人間は人間関係の複雑な編み目の中で、周囲から期待される役割を演じているため、多かれ少なかれ仮面を被って生きることを余儀なくされている。私は研究者としてはほとんど無名の一介の学徒にすぎないが、それでも在外研究員として韓国の大学に滞在していた時など、学会等学術交流の場において、自分の名刺の肩書に「〇〇〇教授」とあるのに随分助

けられた(?)のではないかと思う。少なくともどこにも所属のない肩身の狭い思いをしないですんだのではないだろうか。また、そのことによって、一人の研究者として私の実像以上に相手の目に映ったことだけは疑えない。しかし、実はどこそこ学校の教授であることと、哲学(私に即していえば中国哲学)の研究に従事することとは、本来は全く関係のないことである。

しかし、私は退職後はそういう肩書から一切離れて、裸一貫の自分に立ち返る。そして、そういう過去のあらゆる肩書を脱いで、果たしてどれだけのものが真に自分のもの、正味の自己として残っているか、考えてみると甚だ心許ない。果たしてその残余のものがあるのか、それが私の人格をどれだけ光り輝かせてくれるものなのか、大そう心細い。しかし、仮にそうだとしたとしても私は人間的な乏しさに耐えて生きていく他はない。幸いなことに、私が転居する首都圏近郊のある市には関東崎門学の中興の祖稲葉黙斎の遺跡があり、また、今後著書の執筆を予定している朱子学者並木栗水の生地も近い。私はかかる先人たちの著書の研究を通じて、今後は自分の学問の完成を目指したいと思う。



若いときは定年退職が遠い先のことと思っていましたが、いよいよ3月で定年となりました。これまでを振り返ってみると、他の先生とは異なる人生ですが、無事にここまで歩んで来られたことを感謝しています。

はじめは一般企業に就職し、コンピュータシステムの開発業務に携わっていました。そのころはコンピュータの黎明期で色々なことに利用され始めた時期でした。大型コンピュータが主流の時代で、ようやく中型コンピュータが普及しはじめ、まだ PC (パソコン) はありませんでした。忙しい時期は毎日残業で夜遅くまで働きましたし、土日にも出勤していました。今は過労死ラインとして残業 80 時間が目安とされていますが、忙しいときはそれ以上の残業をしていました。仕事をやらされていたというよりも、新しい技術を習得できることが楽しく、疲れを感じる暇はありませんでした。しばらくして PC が生まれ、はじめて見たときにはこれから世の中が大きく変わる気配を感じたものです。その予想を大きく上回り、今やどの会社や家庭でも PC が使われるまでに至りました。

コンピュータの仕事をするためには次から次へと生まれる新しい技術を試行錯誤で理解することが必要で、仕事をして行くうちに何とかならないものかと考えるようになりました。そして本にまとめてはどうかと思いつきました。学生のころは国語が大嫌いでした。長文を書いたこともないのに、何故か本の原稿を書いてみようと思い立ちました。色々な出版社に企画を持ち込んで提案したところ、何社かに賛同してもらえました。何とか原稿を書き終えて 1 冊目を出版すると、次の本を思いついて次を出版するようになりました。平日は仕事で忙しかったので、原稿の執筆は休日に行いました。そうこうしているうちに、いつの間にか 12 冊の本を出版していました。

本の原稿を書いたことが関係しているのかも知れませんが、もう一度勉強をしてみようという思いが沸きあがり、大学院の社会人課程を調べたところ、仕事を続けながら博士課程で勉強することができると分かり、さっそく入学願書を提出し、入学試験を受けました。合格してからは仕事を続けながら勉強する日々が始まり、なかなか思うように時間が取れず途中で断念しようかと考えたこともありましたが、何とか 3 年で博士課程を修了することができました。

これを機に、技術者の教育を考えるようになり、大分高専の情報工学科で教鞭を取るようになりました。これから情報教育を充実して行く時期でしたので、情報工学科の教育がどのようなものか調べ、カリキュラムの設計に数年の時間を費やしました。理想的なカリキュラムを策定し、現在の在校生からどのような形で組み替えを行っていくのが大変でした。それまでの

経緯を無視していきなり変更することはできませんので、新 1 年生から順次 5 年をかけて少しずつカリキュラムを変更しました。また、教育に必要な設備も徐々に充実させました。

世間で介護が大きく取り上げられるようになり、高専でも介護支援制度ができて他の高専へ異動できるようになりました。もともと宮崎出身でしたので、この制度を利用して都城高専の電気情報工学科へ来ました。高専でも色々違うことを実感しながら 4 年が経ち、定年を迎えることとなりました。都城高専ではプログラミングを主に担当し、色々と考えながら指導に取り組んで来ました。得意な学生は自分でも勉強し、すぐに理解しますが、そうでない学生にとっては理解が難しい勉強です。抽象的な内容はいったい何なのか理解することが難しいので、指導に当たってはできるだけ具体的な例を使い、図で説明するように心がけました。指導方法を年々工夫することで、1 年目より今では理解している学生が多くなったことを実感しています。

高専を卒業すると、多くの学生が会社で技術者として働くことになります。進学した学生も将来は就職して技術者になります。技術者はこれまでにない新しい製品を開発し、世に送り出すことが仕事となります。新しい製品はそれまで誰も作ったことがなく、作りさえ誰も知らないということになります。従って、自分で考えるしか方法がありません。高専で学んだ基礎知識をどう活用するかは卒業生の知恵にかかっています。知恵が出るのはその基となる知識があつてのことです。知識を増やすために、専門に限らず色々な本を読んでもください。いつか仕事で、高専で培ったことが役に立ったと感じてもらえれば大変光栄です。卒業してこれから先、いつ何に遭遇するか分かりませんし、予想できないことに会うこともあるでしょう。そのとき、どう乗り切るかがその人の本当の能力です。皆さんが卒業後の人生を乗り切って、無事に定年を迎えられるよう祈っています。



第1学年

- ・機械工学科:綾峻作 『君たちはどう生きるか』を読んで
- ・電気情報工学科:原田亮介 『坊っちゃん』を読んで
- ・物質工学科:甲斐心 『変身』を読んで
- ・建築学科:今村真之祐 『陰翳礼讃』を読んで

第2学年

- ・機械工学科:井野内文登 『コンビニ人間』を読んで
- ・機械工学科:山内陸玖 『風立ちぬ』—「生きる」ということの意味—
- ・電気情報工学科:野口芹菜 『アンナ・カレーニナ』
—本から学んだ「人の生きる道」—
- ・物質工学科:森晏奈 『海と毒薬』を読んで
- ・建築学科:石本未憂 『枕草子』を読んで
- ・建築学科:山崎響生 『変身』を読んで

第3学年

- ・機械工学科:石坂遥 『李陵』を読んで—たった一言の勇気—
- ・電気情報工学科:田中恒成 『変身』を読んで—虫の正体と変身—
- ・物質工学科:田中薫 『砂の女』を読んで
- ・建築学科:大迫鈴奈 『桜の園』を読んで

『君たちはどう生きるか』を読んで

一年 機械工学科 綾 峻 作

「君たちはどう生きるか」この問いかけが題名、そして一番後に投げかけられている。この題名からはいかにも難しそうな説明文がたくさんあるのだろうと想像してしまう。しかしよんでみると主人公であるコペル君を中心に起こる出来事や、キーパーソンであるおじさんとの話などによるとてもおもしろい物語である。そして、読み終えた後に再び「君たちはどう生きるか」と考えると読む前とはまた違った考えが浮かぶものである。

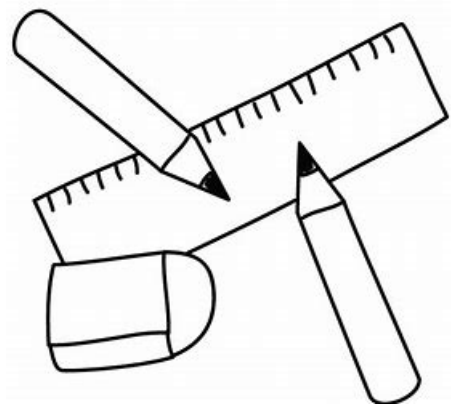
コペル君の発言と考えに私はいろいろと考えさせられた。中でも「粉ミルク」。これを作るひと、牛を育てる人等、たくさんの方の力によりこれがあると、人は違った視点でみると、何か当たり前にあるものもたくさんの方がいてはじめて手元にあると気づくのである。そこで叔父さんは「常に自分の体験から出発して正直に考えてゆけ、ということが大切なんだ。」とコペル君に言う。この言葉が、私自身の将来について考えさせてくれた。機械工学を学んでいるということは物づくりに関する職につく。そこでも自分の体験から考えて、改善したり新しいものを作っていく。工業化が進む日本や世界においてとても重要であると感じた。

浦川君。コペル君の学校の同級生である。彼は運動、勉強、などをやらせてもからっきしな生徒である。そんな彼が実家のお店で器用に箸を使って油揚げを揚げる。それを見たコペル君は叔父さんに話す。叔父さんはコペル君に消費者と生産者について教えてくれる。そこで「君は生産する人と消費する人という、この区別の一点を、今後、決して見落とさないようにしてゆきたまえ。」と伝える。将来生産する人となる私にとっては深い言葉である。だが、今は、何も生産できない、どんな人であろうと、生産している人に対しての慎しみ、敬意を忘れてはいけないということを教えてくれる一節であった。他にも考えさせられたり、何か心にひびく叔父さんの言葉がある。「人間の立派さがどこにあるか、それを本当に君の魂で知ることだ。」「英雄的な気魄を欠いた善良さも、同じように空しいことが多い」といった言葉である。どの言葉を一つ一つ考えてみると深い。

コペル君にある大きな出来事が起こる。それは友人の北見君が上級生から殴られた時、友人の浦川君、水谷君のように、かばうこともできずに一緒にその光景をボーっと見ていただけだった。それが原因でコペ

ル君は寝こんだ。そして叔父さんはコペル君に物語の中で一番私の心にひびいたことを教える。それは、過ちを犯したからこそ、正しい道が見えるということである。学生という立場では、友人関係、勉強、その他様々なことで葛藤し危まちを起こすこともある。しかしその過ちから学ぶものもあるのだ。恐らく学生だけではない。他の世代でもそうだろう。

この本は、読んで気付いたことはたくさんあるが、新しく学ぶだけではなく忘れていたことも思い出させてくれる本だと思う。成長していくと忘れる。変わることもある。そのほとんどを思い出せるとも良い本だ。私は高専生としてどう生きるか考えようと思う。そしてたまにはこの本を読み自分がどう生きるか考えなおしていきたい。



『坊っちゃん』を読んで

一年 電気情報工学科 原田 亮介

私は、この作品を読み、『歌は世につれ、世は歌につれ』ということわざが頭に浮かんだ。このことわざは、歌は時代と共に変化し、時代も歌と共に変化していくという意味だが、これは小説などの本にも言えることだと思う。一方でこの本には、時代には存在しない素晴らしいところがあるから、名作とまでよばれるようになったのではないかと思う。

私がこの本を読み始めて最も印象強く残ったことは作者である夏目漱石の文章の書き方である。そして、この独特な書き方こそが、前述した現代に無い素晴らしいところだと思う。

私が思う独特な書き方は二つある。

一つ目は、主人公である坊っちゃんの感情や考えていることの書き方である。私が知っている現代の小説では、作風やジャンルによって多少の差はあるが、全体的に主となる登場人物全員の感情や考えていることが描かれる。しかし、この作品は主人公である坊っちゃんの感情や考えていることしか描かれていない。このことが現代の小説とは違う、作者独自の独特な書き方だと私は考える。そして、この書き方だからこそ生まれる読み応えや味わいがある。それは、より坊っちゃんと読者の感情が一体となり、作品に深く入り込めるといふことだ。このことは、私が読み進めるうちに気付いたことであるが、主人公が一言話したりするたびに、その時の気持ちや発言に対する意図がほぼ書かれていた。特に、私が印象に残っているのは、中学校の教師になった坊っちゃんと、その中学校の教頭との会話である。この会話は、教頭からの嫌味が少々含まれており、その嫌味を様々な言葉で例える教頭の話術も見物だが、それに対する坊っちゃんの感情が一言ひとことに対して書かれている。このことにより、坊っちゃんの人物像がありありと描かれ、読者を引き

込むと同時に、こんな考え方もあるのかと驚かされたりする。

そして、二つ目は、主人公の坊っちゃんの人物設定である。坊っちゃんは、作品のはじめでは、近所中で悪さを働いたり、喧嘩をして怪我をさせたり、こうしゅから飛び降りたりと、それこそ現代で言う悪ガキのような存在であった。しかし、そんな悪ガキにまるで似合わないように、淡々と学業を修めていき、教師になっていく成長を遂げていく。ここで私が思った独特な文章の書き方は、主人公の変化に対する過程が短いことである。あくまで私個人の印象なので絶対にそうだとは言い切れないが、現代の小説ならば、主人公の成長に伴って、様々な葛藤や出会い・出来事があった上で、成長の分岐点を進んでいくように考えられる。しかしこの作品上では、主人公のある一定の年齢の場面は詳しく様々な出来事が描かれるが、成長や大きな変化があるときなどは淡々と物事が進んで言っているように感じられた。私はこの書き方によって、作中のメリハリをつけているのではないかと考えた。ある時の時間の進みは緩やかに鮮明に描き、またある時は淡々と早い流れで時間が進んでいく。そしてこの時間のメリハリがあることによって、そこに書かれている出来事が主人公にとって、どれほど重要なかを表現しているのではないかと考える。確かに現代の小説でも十年後などに急な場面変化があるが、この作品はもっと短い時間の中でメリハリがつけられている。

これら二つのことが、坊っちゃんという作品が現代まで語り継がれる名作と呼ばれる理由だと私は考える。私はこの作品を読み、これらのような現代とは違う作風も素晴らしいものであると感じた。これからは、新しい作品ばかりではなく、昔の作品にも触れる機会を作っていきたいと考える。

『変身』を読んで

一年 物質工学科 甲斐 心

私は、カフカの変身を読んで、現代社会について考えさせられました。「グレーゴル・ザムザは、朝起きると巨大な虫になっていた。」という衝撃的な冒頭に、すごく驚きました。なぜかという、普通はありえない非日常的な事に、主人公よりも私は驚いたのです。さらに、主人公は自分の様子を淡々とレポートを報告するかのよう話していたからです。もしも、私がこのような状況になったら、もっと驚いて、ひどく泣きわめくでしょう。しかし、ザムザは驚いたのは最初だけでそれ

からは、ふだんと変わらないありふれた日常をすごしていきます。

私がこの本の中で最も注目したのは、ザムザの妹です。ザムザの妹は、とても賢く、バイオリンが上手な17歳の女の子でした。しかし、最愛の兄が突然、虫に変わり、家族がみな驚きおののく中、この妹だけは、むしろ積極的に兄の世話をしていました。当初妹は、「兄のために」と献身的に世話をします。しかし、そんな妹も、兄の現在の姿を受入れることができず、決し

て姿を見ないように、ザムザの部屋の掃除や、食事の配膳などを行っていました。ザムザは、すでに人ではありません。虫です。妹から見ても、兄の面影は感じないでしょう。しかし、なぜそれでも、「虫」の世話を続けたのか。私は、こう思います。現実を認めたくなかったのだろう、と。私は、この妹の行動にとっても共感できました。なぜなら、私もよく同じ事をするからです。私だけでなく、現代の人々にも同じ事がいえます。つい人は、目の前のことが信じられなかったり、嫌な事があると、その事から目を背け、現実を拒んでしまいます。拒んでも、何も変わらないのに。わかっている、現実を否定してしまう。ザムザの妹や、その家族が行っていたのは、まさしく今の世の人々を表してはいないでしょうか？

さらに、ザムザに関しても同じことが言えます。少し境遇が違いますが、虫になってしまったザムザを現代的にたとえるなら、引きこもりです。ザムザの場合は、予期せぬことで職を失ってしまいましたが、それ以外は、引きこもりと一緒です。家族からご飯を提供してもらい、自分からは動けない。グレーゴル・ザムザは、

予期せずして、そのような状態になってしまったのです。そして、最後は、家族に見捨てられ、死んだ事を悲しまれる事なく、むしろ喜ばれる。

カフカの作品は、現代に書かれたものではない。しかしそれでも、こんなにも多くの共通点があるのはなぜでしょう。私は、この本が、現代に近いのではなく、私たちが生きる現代が、この本に近づいたのだと思います。私は、この本から、今ある現実から目を背けず、しっかりと前を向いて生きるという教訓を得ました。このことから、私は、目の前にある問題を後回しにせず、その問題をクリアして、次へ、次へと段階を進めていこうと思いました。どんなに問題を後回しにしても、いつかやらなければならない事には変わりありません。ザムザの家族達のように、過酷な現実を前にしても、逃げたりせず、しっかりとその問題と向き合って、その問題を解決しようとする事が、その問題を解決する一番の近道だと思います。例えそれで、解決できなかったとしても、前を向いた事実こそが、私はとても大切だと思います。私は、どんな問題があらわれたとしても、前を向いて、その先へ進める人を尊敬します。

『陰翳礼讃』を読んで

一年 建築学科 今村真之祐

僕は、この本を読んで、日本の建築は、西洋の建築にはない陰を用いていることが分かりました。今の日本の建築では、昔の日本の建築というよりは、どちらかという、西洋の建築、または、西洋風の建築といったシンプルで明るい建築を多く取り入れています。この陰翳礼讃という本は日本の建築が西洋の建築に切り替わる時のお話で、僕は作者の意見と共感するところや、なるほどと思うところがたくさんありました。

まず一つは、建築の中に証明、つまり、明かりを取り入れすぎているということです。日本の建築には、陰を用いることが発達しています。陰には、人の心を落ち着かせ、陰の奥にある闇が静けさを作り出します。ですが、西洋の建築を取り入れることにより、せつかくの陰を明かりが打ち消してしまいます。作者は、ある時、山奥にあるホテルへ泊まりに行ったそうです。そのホテルは、山奥ということで眺望もよかったそうです。しかし、そのホテルに入ると照明がたくさんあり、見ていだけで暑苦しかったそうです。そして部屋に入ると天井が低く、照明が三つ四つばかりあり、とても暑く、絶景が照明の明るさで台無しだったと書いてありました。僕はこの文を読んで、確かに想像するだけで暑苦しいなと思いました。照明をたくさん用いることで、外からの見た目はよくなると思いますが利用者の目線に合わせて設計していかないといけないと思いました。

二つ目に共感したことは、西洋の物を取り入れるのは良いが、なぜ、趣味嗜好、生活習慣に順応するよう

に改良を加えなかったのかということ。確かに、西洋の物が入ってきたときに改良を加えていけば、今ある建築とは違っていたでしょう。しかし、逆に言えば、このときもし改良を加えていたら今ある建物はなく、日本風の建物が残っていたでしょう。日本風の建物がいいという人の意見と、いや、今の建物の方がいいという人の意見を比べると、今の建物の方がいいという人の意見が大半でしょう。だから、大半の人は改良しなくて良かったと思うでしょう。更に、西洋の物が入ってきた時、日本は西洋の物を改良できるような技術は無かったと思います。ですが、今の技術があれば、日本風の家と西洋の物との順応させることができます。これから、もっと日本風の家が増えてくれるといいです。

三つ目に共感したことは、若い者が中心の文化設備で老人に不親切ということです。この問題は、昔も今も変わらないんだなと思いました。やはり、年を取ると体が動かなくなり、何かと不便になります。そして今は、情報化、車の使用などにより、若者にとっては暮らしやすいが、やはり、年寄りにとっては不便です。ユニバーサルデザインなどもありますが、それだけでは生活を良くすることはできません。僕は、全ての人が不便なく過ごすことはできないと思います。ですが、一つ一つの不便を改善できれば、今以上に豊かに過ごすことができると思います。その豊かな空間を創り出すためには、僕たち自身が考えていかないといけないと思いました。そしていつか全ての人が不便な

く豊かに生活できる世界を創り出したいと思いました。

『コンビニ人間』を読んで

芥川賞を受賞した作品を初めて読みました。今までの僕は堅苦しそうという理由で敬遠してきました。しかしこの作品はそういったイメージとは違った、リアルな現代社会が描かれていました。

この作品に出てくる人たちはどこか普通でない部分があります。しかし、読み進めていくとその「普通」というものがだんだん分からなくなってしまいます。

はじめに幼いころの主人公恵子が死んだ小鳥を見て焼き鳥にして食べようと言います。もちろん僕は驚きました。「普通」だったら可愛そうと思うでしょう。しかし、その後の文章を見てさらに驚きました。普通の考えをした他の子どもたちが花をちぎって供えている場面を恵子はおかしいと感じているのです。動物と植物の命を同等に扱う恵子の考えがここでは普通のように感じます。

こうした幼少期を経て大人になり、コンビニという世界を見つけその中で生きていく恵子ですが、ここでもおかしいと思うけど共感できる場面がいくつもあります。

僕のイメージは、コンビニはあまり変化のないものだけけれど、恵子目線の情景は日々変化しているように思えました。しかし、恵子自身は十年以上働いているにも関わらず変化がないように感じました。また、この生活に満足している恵子も疑問に思いました。僕は変化はあった方がいいと思います。僕は釣りが好きでよくやるのですが、自然相手だと常に変化があってそれに応じた釣り方を自分もするのでその時を楽しむことができます。

さらに恵子は体がコンビニでできているといってもいいほどコンビニと一緒に生きていてそれ以外のことに喜びを感じているようにさえ見えます。恵子にとってそれが普通だけれど、ここでは僕の普通とは少し違いました。

そういった中で、この話には白羽という男ができます。この人も僕から見ると普通ではなく、どうしようもない人間でありながら司会や周囲の人間を妬んだり

僕は、この本を読んで様々な視点から建築について深く考えることができました。

二年 機械工学科 井野内文登

蔑んだりしています。しかしこの白羽の言う事も少し分かる部分がありました。それは普通ではないことをすると異常者として扱われるということです。学校でのいじめなどこれにあてはまると思います。周りに合わせないといけないなんてないはずなのに合わせないと異常だと思われる。社会では個性も変なもの他とは違うものと扱われる時があります。このようなことを白羽は的確についていると思いました。

話が進むにつれ、恵子や白羽に抱いていた怖い、気持ち悪いという感覚が、それまで普通だったはずの周囲の人たちに抱くようになりました。白羽と同棲を始めた恵子に対する周囲の反応は、確かに最初恵子に抱いた異常さと同じものがありました。しかし考えなおすと僕も相手からすると異常なことを普通だと思い知らないうちにやっているのだと思いました。周りに流されてやることもあったと思います。

こうなってくるといよいよどっちが普通なのかが分からなくなってきました。今まで使ってきた「普通」という言葉がどれだけいいかげんな言葉かが分かりました。しかしこの言葉を無意識のうちに求めていることも事実だと思います。恵子が求めている普通はコンビニで生きる自分です。コンビニの中では彼女は完璧だけれど周りから見ると心が欠けている。世の中にはこれを正しいと思わない人もいるけれど、自分の中の普通を貫けるのは立派な個性であり異常ではないと思います。

この作品を通してひとそれぞれの考え方、そして普通があることに気付きました。そして他人の思う普通を一概に否定してはいけなく、それを強要することも集団生活の中でやってはいけなくことだと気づくことができました。

この本は、恵子の気持ちにも、周囲の人たちの気持ちにもなれてどっちが普通なのかが分からなくなってしまう。これが作者のねらいだと思います。異常な世界観でありながら自然に入り込めて、自分や周囲にとっての普通についても考えられるような作品でした。

『生きる』を読んで

二年 機械工学科 山内陸玖

『風立ちぬ』、私がジブリ作品の中で最も好きな映画だ。この作品には元となった原作があるということを知った私は理解を更に深めるために原作を読んでもみることにした。

「風立ちぬ、いざ生きめやも」

主人公がプロローグで呟いた詩句だ。かっこいい。率直にそう思った。もちろん読んだ時は意味など分からなかった。それでも私はかっこいいと思ったし、どこかこの詩句に惹かれてしまった。読み進めていくうちに意味が分かった。「風が立った。私たちは生きなけ

ればならない」という意味らしい。読み終わった後にこの話にぴったりな詩句だと思った。結核を患っている妻節子と、それに付き添う主人公の二人が共に支え合いながら生きていくというのがこの本のあらすじだ。生きなければならないというフレーズが話全体を通して伝わってくるのは、やはりこの詩句が話に合っているからなのだろう。

私は読み進めていくうちに思ったことがある。景色の描写が非常に多いということだ。一面に薄の生い茂った草原に始まり、代謝色(赤褐色)の裾野や山肌を見せている八ヶ岳など他にも様々な景色が描写されている。どれも目に浮かぶような美しい情景だ。これは主人公が迫り来る妻の死の前に、より多くのことを考え、また悩んでいるからだと思ふ。私自身も何か考え事をする時は、遠くの景色を眺めながら考えていることが多いから。主人公もまた周りの景色を眺めながら、妻のことや自分のこと、そして二人のこれからのことなどについてより深く考え、より多く悩んでいたのだと思ふ。

物語の中で主人公はよく自分のことを責めていた。病気の妻に何もしてやれない自分の無力さがそうさせてしまっていたのだと思ふ。しかし私は本当に悩んでいたのは、妻節子の方だったのではないかと思つた。先の短い人生に悲しみ嘆くこともあったかもしれない。そしてなにより、自分のせいで夫に迷惑をかけてしまっていたことを悩んでいたと思ふ。毎日変わらない美しい景色の中でこんなことを考えていたのだから、彼女の苦しみなど私たちには到底理解できないものだったであろう。私は読みながら考えていた。もし自分が節子と同じ状況になったとしたらどうだろうと。おそらく耐えられない。迫り来る自分の死を目前に、毎日を楽しく生きることなど私にはできないだろう。しかし、節子にはそのような様子が全く感じられなかった。なぜだろうと私は思つた。後になって考えたことだが、これはおそらく夫である主人公の支えがあったからこそなのだろう。毎日のように妻に付き添い、言葉では表現し難いほどの愛を妻に向けていた主人公の存在は彼女にとって非常に大きいものだったと思ふ。やは

り、自分を大切に想ってくれる相手は必要なのだと改めて感じた。

この作品の中で印象に残った言葉がある。ある夕暮れに夕日を受けている主人公の発した言葉で、「ずっと後になって、今の私達の生活を思い出したら、それがどんなに美しいだろうか」というものだ。これに対して、節子は、「本当にそうかもしれないわね」と返している。この部分を読んだ時、私はいろんなことを考えさせられた。まず、主人公たちはこんな死と隣り合わせの生活さえも幸せに感じているということだ。てっきり、この二人はこんな死の不安ばかりの生活にうんざりしているだろうと思ひながら読んでいた私には衝撃だった。愛する者がそばにいてくれる生活、「美しい生活」なのかもしれない。次に、主人公はあまり遠い未来については深く考えていないということだ。正直に言えば、この言葉は不謹慎と言えれば不謹慎だ。節子の命がそう長くはないことは、皆、言わずとも思っていたことだろう。そんな節子の前で、「ずっと後になって」など言うものではない。主人公は節子が亡くなることなど考えたくもなかったのだろう。逆に言えば、この言葉には節子にいつまでも生き続けてほしいという主人公のせつじつな願いが込められていたのかもしれない。

最終章「死のかげの谷」では節子が亡くなった後の主人公についてが描かれている。節子とともに過ごした幸せな日々を忘れることはできないが、自分は前を向いて生きていかなければならないという主人公の強い思いが見られた。私はここであの言葉を思い出した。「風立ちぬ、いざ生きめやも」だ。生きなければならない。まさにその通りだと思つた。

この本から学んだことは、どんなに苦しい生活の中にも少なからず幸せはあるということ。そして、人には「生きる」という使命があるということだ。自分で思うことができるのがいつになるかは分からない。しかし、そう思えた時、私は「人」として成長できたと感じるができるだろう。この本から学んだことを忘れずにこれからの人生を楽しみながら生きていきたい。

本から学んだ「人の生きる道」

二年 電気情報工学科 野口 芹菜

トルストイと並ぶロシア文学の文豪、ドストエフスキーが「文学作品として完璧なものであり、現代ヨーロッパ文学のなかに比肩するものを見ない」とまで言っている作品をこういう風にいうのは気が進みませんが、私はこのお話を気に入ることが出来ませんでした。その理由の一つに、このお話が不倫の恋について書かれていることが挙げられます。よほどの理由がない限り不倫を受入れることが出来ない私ですが、作中にある「私たちの生活は人間ではなく、神によって結ばれ

ている」という言葉にはとても感銘しました。何かと世間を騒がせている方々に聞いてもらいたいくらいです。そうはいっても、数多くの登場人物の個性を鮮やかに描き分けるトルストイの手法には感服しました。社交界一の美女で、男にも子供にも愛される万能の女性アンナ・カレーニナ。正直すぎる、愛すべきダメ夫、オブロンスキー。アンナとの駆け落ちによって社会的地位や名声を失い、社交界からも遠ざかるヴロンスキー。ヴロンスキーにふられたキチイと、そのキチイに恋をし

二度目の求婚で結ばれるリョーヴインなど登場人物の仕草や言葉遣いが細かく的確に書かれていて、場面場面をやさしく想像することができました。後で知ったのですが、トルストイは現実を空想にたよらず、ありのままに捉えようとするリアリズムの巨匠の一人と評されていたようです。

そんなトルストイの手法によって描かれた素敵なシーンの中でも特に胸を熱くしたのが、リョーヴインが一度はふられた相手であるキチイに再度求婚するシーンです。この求婚の仕方が、想いを伝えるならLINEよりも手紙と考えるちょっと古風な私を虜にしました。その方法は、思っていることの頭文字でお話するというものです。しかし、ここで疑問が生まれました。この頭文字だけで二人がやりとりするためには、エスパー並みの読心術が必要ではないかと。だけど、そんなことを気にしていたらロマンチックなシーンが台無しになってしまうので、ただただ素敵だなと思うばかりでした。

私がこの本を読んでいるとき、そのことを知った母が昔映画のDVDが出ていたと教えてくれたので、観てみることにしました。感想からいうと、本を読んだ後に観る映画は何にも知らずに見る映画よりも、三倍以上楽しめるということです。映画なのでカットされているシーンも多く、その時のその時の登場人物の心の声は表情や雰囲気からしか読みとることができませんで

したが、場面の風景や衣装など目からの情報をとても楽しみながら観ることができました。やはり、アカデミー賞で衣装デザイン賞を受賞したファッションは、ロシアの貴族階級にふさわしく、中でも舞踏会のシーンは、ため息がでるような美しさでした。しかし、私がお気に入りと言ったシーンは本と少し違っていました。本ではチョークを使って会話をしますが、映画はアルファベットが書かれたブロックが使われていました。ですが、リョーヴインとキチイの相手を心から想う眼差しは私の想像していた通りで、とてもドキドキさせられました。

私はこのお話を通して、トルストイから人の生きる道について考えさせられました。不倫という神の掟をやぶる行為に走って不幸な結末を迎えざるをえなかったアンナと、農村で実直に生きて信仰に目覚め、幸せをつかんだリョーヴイン。どちらの道が良いかははっきりしてはいますが、この世には他にも様々な道があります。そんなたくさんある道の中でも、キリスト教信仰している私は、「この世にあって、この世に迎合せず、主に従う生き方」をしていこうと思いました。

今まで長くて難しそうだからという理由で遠ざけていたロシア文学でしたが、読んでみると奥深くておもしろい世界でした。これからはチェーホフやドストエフスキーなどの作品も読んでみようと思います。

『海と毒薬』を読んで

二年 物質工学科 森 晏 奈

「病院で息を引き取らぬ者は、夜ごとの空襲で死んでいく」世の中だったからこそ、こんな残酷なことが行なわれたのではないかと思う。

米軍捕虜の生体解剖実験が行われたこの病院では、自分の地位を上げるために、貧しい施療患者を危険な新型手術の材料に利用していた。いくら、今後の医療のためであっても自分の命を投げ打つことができるだろうか。医者として患者の命を軽く扱うことができるだろうか。今の世の中に生きる私は絶対にできない。

私は、この作品によって、人間倫理についてとても考えさせられた。当時は人間が人間として扱われていなかった。「俺が恐ろしいのは、自分の殺した人間の一部分を見ても、ほとんど何も感ぜず、何も苦しまないこの不気味な心なのだ」これは良心の痛みも罪の呵責も感じない戸田という医学生が解剖実験後に呟いた言葉である。私は初め、この言葉には戸田の異常な性格が表れていると思った。なぜならこの解剖実験は、肺を少しずつ切除し、どの程度まで切除したら人は死亡するのかという、死亡を前提とした調査であったから。生きた人間を相手にする行いとは思えない、とても残酷で非人道的な行為である。たとえ血や遺体を見慣れた医学生でも、こんなことを行なえば、

恐怖や不安や後悔で押し潰されそうになると思うからだ。また彼は、幼少期から盗みや姦通などの罪を犯してきた。しかし、それらに対して醜悪だとは思もの、「他人の眼や社会の罪だけにしか恐れを感じず、それが除かれれば恐れも消えてしまう自分」を不気味に思っていた。そこで、自分の犯した殺人に恐れを感じるのか、こんな大それた行為を果した後、自分は生涯苦しむのだろうか、これらを確かめるために解剖実験に参加したのである。そんな好奇心にも似た動機で、残酷な実験に参加する戸田に共感することは、私は一生できないだろうと思う。

しかし、作中は戦争真っ只中である。今の私たちからしたら異常なことでも、異常なことで溢れていた当時は、当たり前なことだったのではないだろうか。そう考えると、戸田の呟いた言葉の不気味さは、彼の性格だけが原因ではないと思う。

私を特に震撼させたのは、この解剖実験に参加した軍人が解剖実験前に、捕虜の生肝を宴会の余興にしようと話しながら医者として笑い合っていた所だ。これから人を一人殺そうとしているのに、実験後に宴会を開こうと考えていること、平気で笑い合い、しかも、臓器をまるでおもちゃのように扱っていることにとっても恐怖を感じた。

この作品は戦時中の日本で本当にあった出来事が元になっている。私はこの作品によって、人間は戦争によって、どう変えられてしまうのか学ぶことができた。今、日本で戦争がないからといってそれは他人事に

はできないし、自分の命も他人の命も侵害されてはいけないものだと思う。私は、世界中で何が起きたとしても、命をないがしろにするような人間にはなりたくないと思う。

『枕草子』を読んで

二年 建築学科 石本未憂

私は『枕草子』が好きなので、今回あらためて現代語訳を読んだ。やっぱり好きなことを確認した。書かれて千年以上の月日経っているにも拘わらず内容に共感できることや清少納言のセンスや感性が好きで、そして清少納言のすごさを再度思い知ったので、いくつかの段について書いてみたい。

まず、「風は(一九〇段)」の風について書かれているところ。風といったら初夏に吹く風が涼しくて好きなのだが、彼女は嵐が良いと言う。明け方に格子なんかを押し開けた時に嵐が冷たく顔にしみるのが気持ちよ。確かに嵐の時の風は涼しく冷たく心地が良いものだが、言われなと思ひ出せないような事を書く彼女の感情は最高のものだと思う。

現代でも共感できると思う段の一つに、癩にさわることやものが書かれた「にくきもの」(二五段)がある。例えば、そこそこの役職に就いている人が無作法を働いていたり、大したことの無い人がにやつきながらやたらと喋っていたりするの幻滅すると書いてあった。正直とても共感できる。今でも、礼儀に欠ける人は疎ましいのに、それが人の上に立つ立場の人間なら尚更嫌気がさす。そして、愚痴っぽくて何でも羨ましがり、人の噂話が大好きで、根掘り葉掘り聞くような人も腹立たしい。と書いてある所が、私は、一番共感できる。今も昔もこういう所は変わらないのかと妙に感心してしまった。後こんな人間には絶対なりたくないと思った。

清少納言のセンスが素晴らしいと思った所は「月のいとあかき(二一八段)」である。月が明るい夜に、牛車で川を渡る様子が書かれているだけの短い文章なのだが、月ではなく牛車のたてる水しぶきに注目し、水晶の砕けるようだ表現する彼女のセンスは素晴らしいと思った。この段の凄いのは、文章自体は簡単なのに情景をたやすく想像できることだ。月は辺りを明るく照らし、水しぶきは砕けた水晶のようにきらきら散ってゆく。牛車は川をのんびり進み、周囲は心地良

い静けさに包まれている。そんな幻想的な情景を、約五十字でまとめる彼女の表現力は、流石と言わざるをえないと思う。

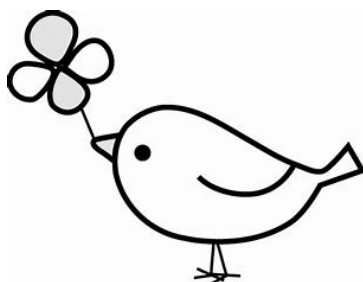
ここからは、『枕草子』を読んで素晴らしい思ったことを書こうと思う。

一つ目は、一段一段がきれいに完結していて、そしてそれ故に読みやすいことだ。『枕草子』は結構な文章量だったが、読んでいる最中はそのことを全く感じなかった。飽きることもなく、無理に読んでいた感じが無かったのだ。なぜかと考えたとき、一段一段が短く簡素で、しかし話のオチまでがきれいにまとまっているからだと思った。だから次次読んでも飽きることはない。清少納言のこの技術は素晴らしいと思う。

二つ目は、原文のリズム感や言葉の響きについてだ。あまり良くない読み方だとは思いますが、古文を読む時、言葉や文章の意味を理解しようとせずに、メロディーを聞くように読むのが好きだ。『枕草子』は、それがやりやすく感じた。簡潔で、古語のリズムを感じながら読むことができた。淡淡と語られているようで、ちゃんと緩急がついている。曲を聴くようにスルスルと読めて、気がつく最後まで読んでいるのだ。

三つ目に、千年以上経っても読まれていること。『枕草子』は随筆である。夢あふれる物語や、しかるべき道へ導いてくれるような指南書などではない。一人の女性が思った事、感じた事、体験した事を綴っただけの作品である。それが現代まで読まれているのは本当にすごいことだと思う。たとえ歴史的な価値があっても、共感できたり、おもしろかったりしなければ、そこの書店で手に入ることもないだろう。清少納言のセンスと感性があつてこそ、現代まで読まれ続ける名作ができたのだと思う。

できるだけ、彼女のような感性を持って、身近な事柄や自然に目を向け、アンテナを張り巡らせ、ささやかな事でもキャッチして、そのことに感動できるような感受性をもって生きていきたいと思う。



『変身』を読んで

二年 建築学科 山崎響生

カフカ『変身』、私がこの本を読むきっかけはいたって単純だ。その表題である。幼い頃からアニメ、漫画などに触れていた私からすれば、この二文字は実に劇的なストーリーを想像させた。その期待とは裏腹に、何とも惨たらしい作品だったのだが。

セールスマンのザムザ・グレゴールという男は、ある朝、突然毒虫に変貌していることに気付く。とっくに出勤の時間は過ぎている。これまで病になどかかったことのないグレゴールだが、心配して家まで来た支配人に対し、身体の具合が良くないことを告げる。姿を決して見せようとしないグレゴールを、当然周りは怪しく思い、結局正体は父と妹に露顕する。それでも献身的な妹のお蔭でしばらくの間は特に問題が起きずに済むのだが、ある日母親にも正体を知られてしまう。真実を知った母親はその場で気絶してしまい、それを機に家族とグレゴールの関係は少しずつ崩れていく。グレゴールは稼ぎも良く、家計は彼に任せっきりだったため、生活も困窮を極めるグレゴール自身、家族を愛していたからこそ仕事を一番に考えていたのだろうし、家族も彼を愛していたらと思うと、非常に残酷だ。

甚だしく無慈悲な作品だが、さらにそれを強烈にしているその文体なのではないかと、私は思う。毒虫への変貌、絶望の家庭生活。常識から逸脱した有りと有らゆる不可思議な事象は、こんなにもかと言うほど淡々と書上げる。延々と不協和音で音楽が進行していくような、そんな感覚である。むしろそれが快樂であるかのような錯覚に陥らせるかのような、奇奇怪怪な文章、現文との対比を妙絶に映し出した神秘的な不協和音には、一体どのような意味が込められているのだろうか。カフカは何を伝えたいのか。私が思うに、カフカはこの作品を通じて「非現実な現実」というものを伝えたいのではないだろうか。現実離れた生活を現実的に描写することで、人間の恐ろしさを大胆に表現しているのかもしれない。一見矛盾した事がらを

練み合わせることで、読者に強烈な印象を植えつける。誰もがこの作品を読めばそのおかしさには気付くのだろうが、「非現実的な現実」は現代社会に潜んでいると、私は考える。例えば、ブラック企業に勤める日本のサラリーマンはどうだろうか。残業、休日出勤は当然の職場で、「頑張れば頑張るだけ良い」という半ば洗脳的に働かされるサラリーマンは、それが現実だと考えているかもしれない。本当にそれで良いのだろうか。他にも、現代社会には、良く良く考えたら可笑しいが一般的になっている事がらなんてたくさんあると思う。カフカはその気持ち悪さを、毒虫への変身、それに伴う家族の崩壊という常識から並外れた非常に分かりやすいモデルを用いて表現しているのではないだろうか。残酷な家庭生活、残酷な人間関係を写實的に表現することで、我らの常識のズレに警鐘を鳴らしているのかもしれない。

グレゴールは何故毒虫変身してしまったのだろうか。グレゴール自身はセールスマンで、その心労をドア越しに支配人に伝えている場面がある。彼は家族を愛し、家族に愛されていた。そのため彼は仕事に全力を注いでいたのだが、その仕事の大変さから、心の深層に眠っていた、「現実逃避したい欲求」がある日覚醒したのかもしれない。仕事の大変さと家族を背負う心労が、グレゴールをこのような姿に変えてしまったと、私は解釈する。結局グレゴールは家族全員に見捨てられ、死んでしまう。グレゴールが死んだ時、家族は喜びにつつまれる。何と恐ろしいことか。

この作品を読んだ後、心の一部を抉られたような、鬱に近い感覚を抱くと同時に、「もし家族が毒虫に変身したら、愛することができるだろうか。」と自問に浸った。だがしかし、すぐに新たな結論に至った。「変身させてはいけけないのだ」と。残酷極まりない作品だったが、その文体から、人間の冷酷さの中に奇妙な温かさを感じた。

『李陵』を読んで

三年 機械工学科 石坂 遥

「遺憾この上極まりない。」その一言を言うのにどれ程の勇気が必要だったのだろうか。

この作品は中国の前漢時代、主人公である李陵が匈奴と戦うために歩兵を率いて北へ出陣するところから幕を開ける。匈奴との戦いは李陵群が劣勢で、終りには李陵が捕虜として匈奴に捕らえられてし

まう。李陵が捕虜となっていることを知った漢の皇帝、武帝は激怒し、李陵の一族を滅殺しようとする。誰もが武帝を恐れて、李陵を非難する中、たった一人司馬遷だけが「遺憾この上極まりない。」と李陵をかばう。武帝の怒りに触れた司馬遷は宮刑に処せられ、刑の執行後はかつて父から託されていた歴史書『史記』の

執筆を始める。

一方、匈奴の王は李陵を手厚く遇し、王の息子である左賢王との友情も芽生えたが、故郷への思いを捨てきれずにいた。しかし、家族が刑罰を受けたことを知ると、李陵は匈奴と共に生きることを決意する。そこで、李陵と同じく捕虜として捕えられていた蘇我に匈奴に協力するように頼み行くが、匈奴の一員となってしまう自分を恥じて頼むことはできなかった

そして、漢の武帝が亡くなり、皇帝が変わると捕虜として捕えられていた李陵と蘇我の帰国が認められた。李陵は匈奴の一員となった手前、帰ることはできないと、蘇我を別れの宴で見送ることにした。しかし、宴では色々な思いがこみ上げ、何も蘇我に言えず、ただただ蘇我のために歌い、舞ったのである。

その後、司馬遷は歴史書『史記』を完成させた後、亡くなり、李陵のそのあとは不明であるということでこの引品は幕を閉じる。

この作品で着目すべき点が多いが、その中でも私は、司馬遷が李陵をかばい弁護した点をあげたい。それでも勇敢に戦った李陵をほめたたえていた者が、手の平を返すように李陵を非難し始める。そのような状況でただ一人、りりょうを弁護する司馬遷。罰を受けても李陵を弁護したことに後悔はないと言い切る。私はその司馬遷の正義感あふれる心に胸を打たれた。

私もこのような状況には経験がある。それは私の所属していた水泳クラブでのこと。それまでは仲間同士、仲良くしていたのに、ある出来事をきっかけに手の平を返すようにその人を非難し始めた。その苦しい状況

で弁護してくれる人がいるということがどけほど心強い。また、相手に反論することがどれほど勇気のいることで、どれほど心が削られることか。もし、李陵が、司馬遷が自分をかばってくれたことを知ったら、故郷への思いを捨てきれないまま、匈奴の一員になるという選択をしなかったかもしれない。李陵の選択を変えるくらいに彼の一言は大きな力を持つ言葉だったと私は思う。しかし、この一言を言ったがために、彼の人生は大きく変わってしまったというのもまた事実である。少しぐらい、あの行動を悔いる心が生まれてしまいそうなのに、彼は自分の行動を恥じず、後悔はないと言う。私は、あのときこうしていれば良かったと自分の行動を後悔することがよくある。そのときはもっと自分が後悔しないよう、心に正直に行動しようと思うのだが、なかなかうまくはいかない。だから、彼が自分の行動は間違いではなかったと後悔せず自信を持って言えるその姿がとても輝いて見えた。いつか私も自分の行動を後悔せず、自身を持って間違っていないかったと言えるようになりたいと強く思った。

そして、最後に私はこの作品を読んで自分を貫き、後悔のない行動をする強い心を学べたと思う。この作品は難しい漢字や熟語を多用しており、理解しながら読み進めるのはなかなか難しかったが、自分にとってとても勉強になった。今回読んだだけでは完全に内容や深い意味まで汲み取ることはできなかった部分や、また何度も読むことで新たに思うことも出てくるかもしれない。だから今回だけに終わらず、また李陵という作品を読んで新たに多くのことを、学んでいきたいと思う。

『変身』を読んで

三年 電気情報工学科 田中恒成

「ある朝、グレーゴル・ザムザがなにか気がかりな夢から目をさますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な虫に変わっているのを発見した。」という書き出しと『変身』というタイトルはあまりも有名である。読書や文学とは無縁の者ですから、一度は見聞きした経験があることだろう。

私はこの本を読んで、たった一つだけ疑問を抱いた。彼が変身した虫とは、いったいどのような虫だったのだろうか。この本を繰り返し読んでみても、これだ、という虫の姿を思い浮かべることができない。固い甲羅と強靱なあごを持ち、たくさんあるか細い足からは少々ねばつく粘液を分泌する。そんな虫が果たしているのか。いるにはいるのかもしれないが、ムカデのような虫にも思えるし、コガネムシに似た甲虫のようでもある。

どうしても気になったので調べてみると、『変身』の初版表紙絵について、著者であるカフカ自身が

「昆虫そのものを描いてはいけない」「遠くからでも姿を見せてはいけない」と注文をつけていたらしいこ

とが分かった。つまり、「虫の姿については読者の想像にお任せする」ということなのだろうが、カフカがそのような注文をしたのは何故だろうか。ただの、ある男が虫に変身する物語の材料としての「虫」であれば、表紙絵にはっきりと虫の姿を描いてもなんら問題なかったはずだ。むしろ、読者が正しく状況を読み取るためには、虫の姿をよりイメージしやすい方が適切であるように思う。だが、カフカはそうしなかった。私は、そこに「虫」の正体があるのだと推察する。

別の解釈をしてみると、虫の姿を描くことには、なんら意味が無かったのかもしれない。「虫」はただの虫ではなく、何かの象徴として描かれているという考え方だ。虫の姿を正確に描写した場合、読者である我々は「こんな姿をした虫なのだ」と、ある種の固定概念に囚われてしまい、「虫」をただの虫としか意識しなくなるだろう。そのため、「虫」が象徴する何か、つまりは、「虫」の正体を促えることが難しくなってしまう。だからカフカは、あえて「虫」の姿を濁したのではないだろうか。では、「虫」の正体はいったい何だというの

か。

「虫」の正体、それはきっと「不条理」だろう。そう考えると『変身』は、ある男が突然虫に変身するという荒唐無稽な創作物ではなく、ある男を襲った不条理を描いた作品だという解釈になる。不条理は、何の前触れもなしに、突然我々を襲う。つまり、誰しもが不条理に襲われ、その不条理らよって変身をとげることがありえるのだ。小説の中だけのものと思われた「変身」は、実は、読者である我々にも十分起こりうることなのだ。

『変身』は、暗く悲劇的なバッドエンドを迎えたと言われることの多い作品だが、本当にそうだろうか。確かにグレーゴル・ザムザは、不条理によって悲惨な死を遂げた。しかし、グレーゴル・ザムザの周囲を見渡

してみれば、一概にバッドエンドだとはいえないだろう。グレーゴル・ザムザが虫に「変身」したように、ザムザ一家もまた「変身」を遂げたのだ。グレーゴル・ザムザが変身する前、一家は彼に依存しきっていた。しかし、グレーゴル・ザムザの「変身」という不条理によって、彼に依存する生活から脱却した。物語の最後には、家族皆による相談の末、将来に希望を見出す場面もある。変身は不条理によるものだが、その影響は決して悪いものとは限らない。ザムザ一家のように、むしろ成長をもたらすこともあるのだ。そういう意味で、「変身」のラストは、主人公の悲惨な最期という胸糞悪い展開ではあるが、同時に家族の成長という希望に満ちたものでもあるのだ。

私は、そう考える。

『砂の女』を読んで

三年 物質工学科 田 中 薫

「砂の女」は、次のような話である。学校の教師をしている主人公が砂丘に昆虫採集へ出かけ、その先で男は数十軒の小さな村にたどり着く。この村は砂丘から絶えまなく砂が流れ込み、十日も放っておけば村のすべてが砂の中に埋もれてしまうところだった。主人公は村の人々によって騙され、一人の女が住む民家に閉じ込められ、その女と村のために砂かきすることを強いられる。はじめは村の人々を敵対視していたが時間がたつにつれてその気持ちも薄くなり、最終的には村に残ることを選ぶ。

「考えてみれば、彼の心は溜水装置のことを誰かに話したいという欲望で、はち切れそうになっていた。話すとすれば、ここの部屋のもの以上の聞き手は、まずありえまい。」

男は、はじめこそ砂地からの脱出を試み、それを妨害する村の人々を恨んでいたが徐々に心境が変化していく。そのきっかけとなったのが、「溜水装置」。鳥を捕まえようとして作ったものだったが思いがけず夜露によって水が溜まる仕組みになっていたのだ。

それまでは、男は砂地に閉じ込められている間の「灰色の日常」への回帰を強く望んでいた。しかし一週間、ひと月と時間がたつにつれて、その「灰色の日常」と現在の砂の女との生活は、男にとってもはや同等の価値になっていたのではないかと私は考える。砂地では生活していくうえで必要不可欠であるにもかかわらず配給制であった水は、村の人々にとっては男に対する切り札のようなものであった。男が抵抗したら、水の配給を止め、男が渴きに耐えられなくなり白旗を振るのを待てばよいのだ。男にとってゆゆしき問題であり、砂地での生活における最大の関心事だ

った。男は溜水装置を得たことで村の人々と対等に渡り合えるようになったのだ。

この一文は、彼が部落の人間を敵対視することをやめ、砂地で共に生きていくつもりがあることを暗示しているように思える。

「逃げるてだては、またその翌日にでも考えればいいことである。」

作品最後の一文。この地を出たい、という積極的な思いが男にはもう残っていないことが感じられる。

男は、砂地での生活は不自由ばかりだと感じていた。でも、砂地に来る前の「灰色の日常」においても、実は、不自由ばかりだったのではないだろうか。職場では同僚から干渉され、家にはあまり夫婦仲の良くない妻がいる。それにひきかえ現在はおとなしく献身的な妻がおり、その妻とは「ラジオを買う」という共通の目標に向けて協力し合うことができる。砂をかく仕事さえ怠らなければ、給料も配給ももらえる。今では、溜水装置を研究するという趣味までできたのだ。

「幸福な生活を送っていくには、ほかに何が必要だというのか。」

男がいずれそう思うようになるであろうことが想像できる。

この本を読んでいる間、ずっと喉が渇き、私の体も砂にまみれ、口の中も砂でジャリジャリになっているような感じがした。文章だけでこんな感覚を感じさせることができる作者の表現力に圧倒された。

また、生きていくことは不条理であるけれど、その不条理を肉付けし、意味を持たせていくことが、すなわち生きるということなのだということがわかった。

戯曲を読んだのは今回が初めてであった。人物の会話のみで物語を読み進める。それは私にとって非常に新鮮なものだった。普段ならば場面ごとの様々な情景が浮かぶのだが、これは一貫して脳内に演劇が繰り返された。舞台を歩く足音も聞こえてくるようだった。

そうしてもう一つ、終わりまで尽きぬものがあった。それは温かなセピア色の空気だ。何故だか私は、読書中この空気を文字とともに吸い込んでいた。この『桜の園』の桜は、地主であるラネーフスカヤがひどく愛したものであった。あたり一面の桜の園は、彼女が幼少期から見ていた色である。劇中にも兄のゲーエフと桜を懐かしむ場面が描かれていた。

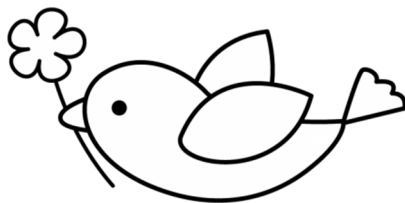
実は私もこの物語と同様、自宅から桜の景色が見える環境にある。桜並木沿いに暮らしており、毎度春には桜の花弁が庭を染め上げる。加えて私は春生まれなので、私の幼少のアルバムには、温かな陽の中で笑う私がいる。物語ではラネーフスカヤが五年ぶりに家へ帰還し、去る所で過去を懐かしみ、思い出を持ち出す。そんな彼女につられて、私も度々桜の季節のことを思い出していた。思い出といえばセピア色だ。そして、それは愛おしいのに戻やしない時間。愛おしさは温かく、春の陽は柔らかい。きっとこのノスタルジーがあの空気を生んだのだろう。読んでいて心地が良かった。

しかしながら、この『桜の園』は彼女の美しい思い出だけではなかった。あろうことか桜が消えゆく事態に陥ったのだ。借金返済のために売りに出す、そんな虚しいものがあるのかと気の毒に思った。生活苦を選ぶか桜を選ぶか。現実を受け止められず、現実逃避を続ける彼女を残念に思った。結局桜の園は、別

荘建設を目的に買い取られてしまった。切ない。こればかりはセピアもモノクロに変わるようだった。私は懐古主義者だから、彼女の泣く思いに同情した。だが、そのモノクロもすぐにカラーに変わった。「ここを出よう。」「貴女には優しい清らかな心がある。」娘アーニャの言葉だ。新しい庭を作ろうよと励まし庭が貴女の胸を温めるからと言った。「夕方の太陽のように貴女の胸に射しこむ。」この表現に感動した。ただの太陽ではないのだ。夕方の、あの溶け落ちゆくような、温かな太陽なのだ。私にまで茜の熱が流れ込んでくるようだ。そして、古い思い出の熱を守り抜くことも良いが、新しいことに目を向けて明かりを灯していくのも、大切なことだと気づけた。

かくして、ラネーフスカヤ家の者たちは屋敷を離れ、各々の新たな生活を始めることとなった。この『桜の園』、並行して各登場人物のストーリーも描かれていた。それぞれの結末には、一見ぱっとしないものもあった。失恋する者、プロポーズを断念する者、皆に忘れ去られて屋敷に取り残される者。これだけではハッピーエンドだと言い切れやしないだろう。それなのに、私は懐疑も哀愁も感じ得なかった。むしろここで、セピアの色が溶けつつあったのだ。私が思うに、彼女らの旅立ちまでの物語は、ここに来るまでの思い出なのではないだろうか。桜も消え、皆離れていき、それぞれの胸に残るのはそれまでの思い出だ。旅立ちが物語の終わりかと思っただ、それは違う。きっと始まりなのだ。あの微妙な結末を受入れたのも、その結末が既に思い出に見えたからであろう。

淡々とした展開に、不確かな結末。それでいてすっきりとした読み応え。チューホフの魅力を垣間見た気がする。まさに喜劇だと感服する思いである。



今年度の活動と来年度の図書委員会について

学生図書委員長:後藤 光貴

図書委員が今年度行った活動は、テーマ展示、ブックハンティング、オープンキャンパス、深山書評です。

ブックハンティングでは、学生が実際に本屋で図書を購入しました。購入した本はテーマ展示同様、学生図書委員がレビューを作成しました。学生目線で図書を選べる機会はなかなか無く、手に取りやすい本が増えたと思います。余談ですが、「図書購入希望」でも学生が図書館にない本の購入が希望できます。

オープンキャンパスは、中学生向けの本のレビュー作成、クイズラリー、閉架書庫ツアーを行いました。高専ならではの蔵書量に驚く中学生の表情は楽しさや期待を含んでいたと思います。専門書の数には保護者も驚きの声をあげ、「是非、高専で学習させたい」という言葉もいただきました。閉架書庫ツアーも例年通り楽しんでもらえて、図書館の魅力を中学生に伝えられたと思います。

深山書評は図書の書評を学生に募集するものです。「高専生の文章力、国語力は乏しい」と言われがちで

今年度も、図書館をより多くの人に利用していただけるように様々な企画を行いました。これらの企画の中にはまだまだ知名度の低いものもあり、改善点も多々あると思われます。これから少しずつになります。より良い読書環境を作ってまいります。

ところで、私が1年間を通して気づいたことがあります。それは閲覧室を使う人が多かったということで

すが、応募された作品は、文章が丁寧で構成がすぐれているものがいくつかありました。選考時に唸られたことは記憶に新しいです。今年度応募された方には、その文章を大事にもらい、これからは活かしてほしいです。私自身、応募された作品に習うことが多かったです。そのため来年度以降、深山書評をより発展させてほしいと思います。

私は、図書館は足を運びやすい場所であってほしいと考えています。足を運ぶ理由は人により違い、勉強をすね場所と考えている人、娯楽のための場所と考えているひと、様々いると思います。どんな理由であっても、それを迎え入れる図書館が私の理想です。そんな理想に近づけること。1人でも多くの方が1冊でも多くの良書に触れる機会をつくること。その2つに関して貢献できた1年であれば、学生図書委員長として嬉しく思います。

副委員長: 大塚 智弘

す。特にテスト期間になるとたくさんの方に利用していただきました。ですので、これからは閲覧室の環境も考えていく必要があると思いました。これを読んでくださっている方も、不便な点がありましたら何なりとお申し付けください。是非みなさんでより良い図書館へと発展させましょう。



第五回「深山書評」実施される

第五回深山書評には11篇の応募が寄せられました。5名の審査員（図書館長および4名の学生図書委員）で選考した結果、下記の通り受賞作が決定いたしましたので発表いたします。

賞名	クラス	氏名	書評タイトル『書名』 著者名	請求記号
図書館長賞	2C	古川 陽	絵画のような1冊『いなくなれ、群青』	913.6/コウノ
深山賞	2E	児玉 聖	人生も幸せも、自分で選んで手にしたい『また、同じ夢を見ていた』	913.6/スミノ
優秀賞 (3名)	2E	野口 芹菜	『わたしを離さないで』を読んで『わたしを離さないで』	913.6/Ish
	2M	瀬戸口 大樹	ドグラ・マグラ『ドグラ・マグラ』	913.6/ユノ
	2M	岩村 輝正	ロボットとは『93番目のキミ』	913.6/ヤマタ
優良賞 (3名)	3M	福島 聖	不幸もものの捉え方『僕は小説が書けない』	913.6/ナカム
	3A	小楠 梨菜	逃げた者と逃げきれなかった者『自殺倶楽部』	913.6/タニム /60900
	1A	安水 楽翔	僕と本『いなくなれ、群青』	913.6/コウノ

★審査員コメント★

深山書評へのご応募ありがとうございました。良作が多く、審査には時間を要しましたが、上記のよう賞が決定しました。皆さんの書評を拝見し、興味が沸いた本がいくつもあります。その本を手に取り、自分の感想と書評を比較してみたいなと思いました。

この深山書評が皆さんにとって良書に触れる機会、作品をより感じる機会になっていたらうれしく思います。

学生図書委員長 後藤 光貴

★表彰式★

2018年1月31日（水）16:30より、図書館第一閲覧室で表彰式を開催いたしました。



【図書館長賞】

絵のような一冊

物質工学科二年生 古川陽

「失くしたものは、何か。心を穿つ青春ミステリ。」この本のキャッチコピーである。

ふと、この本を見つけて、最初の数ページを読んだだけなのに、心から離れなくて、衝動的に僕はこの本を借りてしまった。

あらすじはこうだ。安定した高校生活を送っていた少年、七草は突如として「階段島」と呼ばれる不思議な島に飛ばされる。そして、真辺由宇という少女との再会。階段島を舞台に、七草は彼女と共にこの島の真実へと迫っていく。階段島に隠された真実とは？七草の心境は？そして、真辺由宇との関係は？

もし、この書評を読んで、この本を手にとった貴方は、きっと吸い込まれるようにこの本に惹かれていくはずだ。

なんといっても、この本の魅力は、背景の鮮やかさだ。その文面は、僕達読者の脳にまで入り込み、想像力をかき立て、黒の文字は様々な色彩を現しながら階段島の憧憬を見せてくれる。この小説はとても鮮やかなのだ。

さらに、青春ミステリと謳う小説なので、階段島にまつわる謎解きだけでなく、七草と真辺。2人の関係にも注目しながら見てもらいたい。七草は、真辺がこの島に居ることが許せないという。七草の真意は何か。真辺の気持ちは……甘酸っぱくて、目が離せなくなるラストは貴方の目で確かめて頂きたい。

最後に、「この物語はどうしようもなく、彼女に出会った時から始まる。」

これを覚えておいてほしい。

【深山賞】

人生も幸せも、自分で選んで手にしたい

電気情報工学科二年生 児玉聖

あなたにとって人生とは、何だろうか。

あなたにとって幸せとは、何だろうか。

私は、何気なく流れていく日常の中で、ふとそんなことを考える。あまりにも漠然としていて、いつも完璧な答えを見つけることのできない問い。でもこの本を読めば、少しだけ納得のできる答えに近づけるかもしれない。

主人公の小柳奈ノ花はとても賢い女の子だ。周りのクラスメイトとは一風違う。小学生とは思えない思慮深さを持っている。「人生とは」が口癖で実を射た例えを用いて、自分の人生に対する考え方を述べるのだ。

ある日、幸せとは何かをそれぞれ考えて、授業で発表するという宿題が出される。その答えを見つける

ために、3人の不思議な友達を訪れる奈ノ花。いつもとある建物の屋上に佇むちょっと怖い高校生、ミルク色のアパートに住む季節を売る仕事をしているお姉さん、丘の上の木の家で一人暮らしをしているおばあちゃん。

でもそのちょっと変わった友達は、実は奈ノ花のことを知っていて……？

あなたも是非、奈ノ花と一緒に不思議な感覚とちょっぴりの切なさを味わいながら、自分にとっての人生や幸せとは何かを探してみたい。その答えは他の誰にも決められなくて、自分で選んで手に入れるものだと思うから。

私にとって人生とは何か。幸せとは何か。その答えは、薔薇の下で。

【優秀賞】

「わたしを離さないで」を読んで

電気情報工学科二年生 野口芹菜

世界的に話題のノーベル文学賞を受賞された英国の小説家カズオ・イシグロさん。日本人の名前なのになぜ英国の小説家なのかと少しでも興味を持った方にぜひ読んで頂きたいのがこの「わたしを離さないで」です。舞台はイギリスの田舎にある閉鎖的な施設で、そこでは後に「提供者」と呼ばれるこ

とになる子供たちが暗黙のルールに気づきながらも楽しく生活しています。その雰囲気は青春小説のようですが、読み進めていくうちに気づき始める違和感。その違和感の原因が何か分かったとき、読者は「人間をクローン化してその犠牲の上に人は生きる権利があるのか」を考えさせられると思

ます。確かに提供する側からすると臓器提供計画なんてものはあまりにも非倫理的だと思いますが、もし自分の近い人がその臓器で救われるのだとしたら私はその存在に目をつむってしまうかもしれ

ません。この問題は正しい答えみつけることではなく考えることが大切だと思うので、みなさんもこの本を読んで考えてみてください。

【優秀賞】

ドクラ・マグラ

ブウーンンンンンンン……時計の鐘の低い音で目覚めた青年は、自分の名前も過去も分からない。しかも、何故か四角い病室の床で横たわった状態だった。彼は当惑したまま、ある資料集を読むことに……おのずと自分の正体に近づいていくことになる……。

狂患者の観察記録、「心理遺伝」の論文、怪事件の調査記録、精神科学者の遺言書、アホダラ経の経文……などなど、奇抜で接点のないような幾つもの文章が、あるとき突然、するすると紡がれてゆく。それはあまりに自然……そしてこのまま真実へ！……と、思いきや何故かもう少しのところまで一つにまとまらない。真実と思ったことが虚に寝返る、真実が幾つも出てくる、疑問が疑問を呼ぶなどして、結局「答え」に行き着くこ

【優秀賞】

ロボットとは

この本を読んで最初に思ったのは、ロボットは何なのだろうかという疑問でした。

近年、めざましい技術革新によってSF映画に登場するAIや乗り物が現実のものになりつつあります。あと数年もすれば、AI搭載のヒト型ロボットも町中を歩いているかもしれません。そんなロボットを一般の人が買える世界での出来事を描いている小説でした。僕はそのような点から作者は未来のロボットのあり方を考えるべきだとメッセージを感じました。ロボットは人のような見ためをしていますが、プログラムされた様々なうごきや会話をすることができます。しかし、人

【優良賞】

逃げた者と逃げられなかった者

読みもしない本を毎日一冊借りては返してを繰り返す。幼少期に友人を亡くしてから他人と関わることをしなくなった高野は、毎日それを繰り返す。しかし、その行動が“海の泡同盟”のリーダーである桧田玲子の気に掛かるものとなり高野の日常が崩れる。

機械工学科二年生 瀬戸口大樹

とはできない。考えれば考えるほど混乱し、最終的には何を考えているのかさえわからなくなる……。云々。

もし気を抜けば、直ぐに作品に吞まれて翻弄されることになる。嘘だと思ふなら読んでみるといい。夢野久作の十数年に渡る構想により産み落とされた超大作と、貴方と。どちらが上手か、試してみるといい……。

この現代に生きる全ての人に届いてほしい。きっと「常識」が覆る。

脳汁がフキ出す一冊。情報の交錯。傑作。

※追記。「この本を読む者は、一度は精神に異常をきたす」と伝えられているようだが、それは全くのマト外れだと思われる。だから読んで欲しい、安心して……。妄言多謝。

機械工学科二年生 岩村輝正

間のように考えることはできません。僕はロボットは道具だけとしか見ない方が良くと思います。いくらプログラムされたロボットといえども作ったのは人間です。完璧である保障はどこにもありません。また、ロボット自体の問題ではなく使用する人間にも問題があると思います。ロボットは本の中でのようにテロに使われるなど兵器として使われることがあるかもしれません。

僕はこの本の中でのロボットは人と友達のように描かれていましたが、現実世界ではそのように人と仲よくというようなロボットはもしロボットが町中を歩くようになってもないはずだと思いました。

建築学科三年生 小楠梨奈

“海の泡同盟”は死を望む高校生の集まりで、死に逝く様子を記録する人を求めていた。高野は記録係となり、“ヨドム”と“ヒカルモノ”の話をメンバーの青木から聞く。青木曰く“ヨドム”はずっと付き纏うもの、“ヒカルモノ”は“ヨドム”を消すものであると。

この話は、全く関係のない主人公を死よりも辛い所へ突き落とす話だ。そのため生と死についてより深く考え、感じることでできる話でもある。他人には死に逝く人の最後を心に焼き付けさせ、自分は生から逃げる。残された者は、死と隣り合わせでありながら、自ら死

【優良賞】

不幸もものの捉え方

「僕はちょっとした不幸を招き寄せる体質の持ち主だ。」

この本の主人公高橋光太郎は「小説が書けない」というタイトルのように物事を否定的にとらえてしまう内気な高校一年生です。定期券を車にひかれ、電車に乗り遅れたことで部活動に入りそびれる、同級生に話しかけようとする地震が起こるなど普通では考えられないようでありそうな不幸により不安な高校生活のスタートとなった光太郎ですが、図書室での不幸をきっかけに文芸部に入ることになります。

文系部は部員それぞれが小説を書いています。光太郎も中学二年生のときに冒険小説を書き、文系部は部員それぞれが小説を書いています。光太

を選ぶことはできない。

タイトルの通り、内容は「死」を中心としているが小さな命の存在が明らかになったり、暗闇の中に光が差し込んできたりと「生」へと繋がる描写があり、読み進めていく内に、『自殺倶楽部』の虜になるだろう。

機械工学科三年生 福島聖

郎も中学二年生のときに冒険小説を書いていましたが、ある事件をきっかけに心を閉ざしてしまい、小説を書くこともそこで断念したままでした。しかし部員が五人で新一年生が光太郎のみだった文芸部は文化祭までに部員一人一人が書いた小説、詩をまとめた冊子ができなければ廃部になるという状況になり、光太郎は部の校正担当者である佐野先輩とともに試行錯誤を重ねながら物語を完成させていきます。

その他にも個性的な先輩達、佐野先輩と文芸部 OB 原田さんとの複雑な恋模様など多くの見どころがあります。光太郎が心を閉ざす原因となった出来事とは？是非読んでみてください！

【優良賞】

僕と本

建築学科一年生 安永楽翔

私はこの本を読んで思ったことが三つあります。一つ目は、この作者特有世界観があることです。内容を独特なもので読み進めているうちにどんどん引き込まれていきました。

二つ目は、本の中に出てくる「魔女」という存在です。この魔女は、この物語において重要な人物です。また魔女は本の中で、一度も姿を現していないことによって、この本のミステリアスな雰囲気が強くなり、さらにこの本を面白くさせていると思います。

三つ目はこの本の主人公の性格が冷静なことです。

この主人公七草は性格の中に何か足りない感じで、事件などが起きたら、あわてずに冷静に解決するところがとてもかっこいいと思います。

この本の人物たちは、何か自分の中に足りていなくて、その何かを自分で探しています。この本は大学読書人大賞と読書メーター読みたい本ランキングをどちらかとも一位をとっていて、とても読みごたえがある本になっているので、おもしろい本が読みたい人にはぜひ読んでほしいです。



「図書館からのお知らせ」

図書館開館予定について

- ★今年度の夜間開館は、平成30年2月21日(水)までです。
(なお、平成30年度の夜間開館は、4月4日(水)の開始予定です。)
- ★次の期間は、平日のみ開館します。(土・日・祝日は閉館)
期 間:平成30年2月22日(木)～4月3日(火)
開館時間:9時から17時まで

学年末・春季休業中の長期貸出について

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。
貸出開始日:平成30年2月13日(火)
返 却 日:平成30年4月6日(金)
貸 出 冊数:一人7冊まで

編／集／後／記

図書館だよりNo.82をお届けいたします。

今回の図書館だよりには、本年度をもって退職される望月先生、鶴沢先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただきまた先生方には、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

例年実施している校内読書感想文の入賞作品を掲載しました。入賞作品は、1年生～3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。

春休み中も図書館は開館していますので、春の陽だまりの中、静かな図書館で是非読書に励んでください。皆さんのお越しを、スタッフ一同待っています

